

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 26 日現在

機関番号：32644  
研究種目：基盤研究(C)  
研究期間：2012～2014  
課題番号：24520865  
研究課題名(和文) 農耕民の人為景観化と民俗方位観念生成の相互作用に関する研究

研究課題名(英文) Study on The landscape design of Rice-paddy farmers

## 研究代表者

北條 芳隆 (Hojo, Yoshitaka)

東海大学・文学部・教授

研究者番号：10243693

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)： 沖縄県西表島における初期農耕村落の調査成果を基礎に水稻農耕民が抱く方位観念や他界観の問題をモデル化し、以下の理解が可能であることを解明した。

すなわち仏教が日本に伝来する以前の日本列島先史社会に生きた人々は、太陽信仰と、火山を中核に据えた山への信仰とを主体とするコスモロジーのもとで暮らしていたと考えられる。こうした他界観の様相が明らかになるのは、弥生時代(紀元前8世紀頃～西暦3世紀)であり、この時代はコメを中核とする農耕社会であったが、コメ栽培の定着は東西方位を基本軸線に据えた方位観念、そこに祖霊の住み処を指定する他界観の表示である。これらは祭儀施設や前方後円(方)墳の配列や方位から導ける。

研究成果の概要(英文)： In case of considering the Takai-kan (ideas of 'the world after death') and landscapes from a viewpoint of Japanese archaeology, sun worship and worship of volcanoes were firm foundations of the Takai-kan in the early society of rice-paddy cultivation before 6 CE or introduction of Buddhism. In connection with this point, it can be pointed out that a regional variation of the Takai-kan, which is organized by a specific imagination that a mountain as a cemetery piles up over the Takai-kan, was realized. There were two types of it, which are based on each existing place namely volcanic area or non-volcanic area. Regarding the Takai-kan of non-volcanic area such as the Nara Basin, which became the center of Yamato Authority, a specific site distribution pattern based on the East-West directions as a standard axis is recognized. Furthermore it is most likely that the landscape design of rice-paddy farmers (i.e. sun worship), treating a whole basin as a man-made landscape, was established.

研究分野：考古学

キーワード：水稻農耕民 方位観念 他界観 人為景観 ランドスケープデザイン

## 1. 研究開始当初の背景

日本列島に定着した水稻農耕民は、朝鮮半島からの入植を起点に、その生業上の特質から既存の景観を大幅に改変することを宿命づけられた。常に二次的環境を生み出すとともに、周辺の景観に新たな意味を付与し由緒づけてきた。その典型が特定の山や海などに他界や天界を表象させ、信仰する行為である。こうした観念上の行為が形成される過程は、二次的環境の顕在化のなかで生じた集落域と墓域の切り分けや宗教施設の設置、および相互の配置関係といった人為景観形成の諸段階を年代的に押さえたうえで、古文書史料や民俗伝承との対応関係を検討することによって考古学的に把握することができる。

申請者は平成 22 年度までに沖縄県竹富町西表島網取遺跡で実施した調査結果を基礎に、上記の観点に即して諸事象を整理し、17 世紀前半を起点に展開した人為景観化と方位観念の形成に関する「島嶼モデル」の暫定版を構築した。本モデルの概略は下記のとおりであるが、このうち墓域の設置場所を基礎に本遺跡における民俗方位観が確定する f)・g) の形成を 18 世紀後葉に設定している。

- a) 水稻農耕の本格化に伴う人口の急増
- b) 植生が変化し近隣一帯の森林が切り開かれ、周辺景観がオープン化
- c) 可耕地確保の目的による墓域の整理と山中への移動
- d) 一般成員の墓域を集落から西側に離れた海岸の岩礁地帯に設定
- e) 岩礁地帯の墓域の崖上に「ブシヌヤシキ」と呼ばれる由緒付け施設の設置
- f) 集落の背後の山上に御獄を設け、そこから見渡せる集落・水田域・象徴的な埋葬地の配置関係に対し「腰当信仰」—風水思想の在地的変容形—を充て空間を象徴化
- g) 東側の山を正の側に、西側の山並みを

負に位置づけ、西側に他界を表象

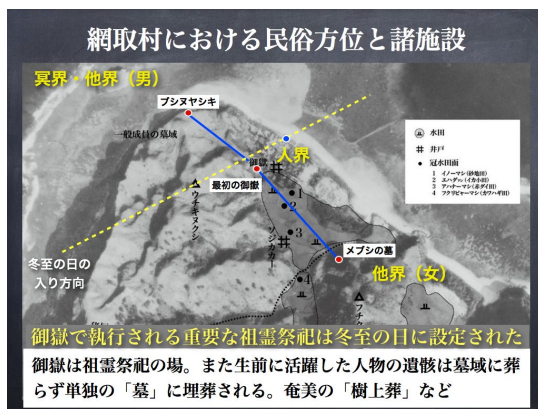
本モデルの特徴は、既存の景観や周辺環境を基礎に観念上の意味づけが必然化する過程を明示した点と、既存の景観の中には人為景観の形成が前提条件として組み込まれたという因果関係を導いた点にある。すなわち既存の抽象観念が「お仕着せ」の形で外部から導入されたのではなく、いわば拡散先・入植先における成功および定着と、その過程での「現地摺り合わせ」がきわめて重要な意味をもったことを強調するものである。本モデルを適用することにより、水稻農耕民が抱く抽象的な観念の歴史的展開を考古学的手続きのもとに開示し、その必然性や地域性を具体的に論じることが可能であるとの展望を抱くに至った。

なお日本列島に定着した水稻農耕民が抱く他界観と人為景観との関連性については「魏志倭人伝」に記載された倭における葬送習俗記事と、記紀における「黄泉国」との対応関係が焦点となる。両者の記事を点検すると、「古事記」の黄泉国訪問譚との間には同形性が認められ、3 世紀と 8 世紀を貫く現象を抽出すると、墓域を山中に置くという明確な共通性を指摘できる。この点を敷衍すれば「黄泉国」という他界観は、墓域の設定場所が山中に置かれ人界と切り離される過程で成立した「可視化された人為景観」を前提とするものであるとの理解が可能となる。その起点は弥生時代後期(1 世紀)であり、出現地域は山陰から東部瀬戸内の一帯である。これら諸地域は、可耕地面積の限られた地域である点での共通性をもち、環境収容量との相互作用のもとで集落域と墓域の切り離しは必然化した。「黄泉国」という独特な他界観は、その結果であると理解される。

すなわち「島嶼モデル」(暫定版)で示した先の c)・d) の現象が、本土エリア一帯では弥生時代後期の時点において広域的に

展開した結果であると理解することが可能となり、構造的な同形性に着目すれば、本モデルは先史時代における他界観や方位観念の解読にも有効であるとの展望をもつに至った。こうした所見にもとづき「黄泉国」なる他界観は、山中を他界として象徴化した結果の産物であるとして、その概要を公表した（下図参照）。

以上のような学術的な研究成果を背景として本研究を遂行した。



## 2. 研究の目的

### (1) 「島嶼モデル」の点検と完成

本研究では、基幹となる「島嶼モデル」の完成を目指した。この目的を果たすために西表島の網取遺跡において再度現地発掘調査を実施し、次の諸点に関する解明を図る。それは a) 定住化の開始年代の絞り込み、b) 碁盤目状集落区画の起点の解明、c) 東側山麓に所在すると伝承される「メブシ」の墓の確認と測量・試掘調査の実施、の3項目である。a) と b) はセットで解明可能であるが、c) については特に重視した。西縁の「ブシヌヤシキ」を男の象徴とし、東縁の「メブシ」の墓を女の象徴とする男女間の対峙関係としての空間認識が民俗方位観念の中に埋め込まれた可能性を浮上させるからである。さらに現地調査と併行して、八重山地域内部における同様の集落景観をもつ他集落との比較点検を実施し、祖霊祭祀や民俗方位観念の現れ方が、共通の

構造のもとでも、表面上は多様性を有することを実証的に解明したいと考えた。

### (2) 「島嶼モデル」の普遍化に向けた基礎的作業の実施

本モデルを日本列島の広い範囲に適用することを目指して、対照的な2地域との比較点検作業を実施する。選択する対象地域と時期は a) 関東地方南部の相模湾沿岸地域における弥生時代後期以降古墳時代後期までの遺跡の諸状況と、b) 中部地方伊那谷における古墳時代中期以降後期末までの遺跡の諸状況であり、両地域での遺跡の展開状況を「島嶼モデル」で開示した諸項目と照らし合わせ、不足する項目を補いながら整理し、それぞれの時期と地域における人為景観化の画期とその地域的特性を明らかにする。この目的を達成するためには、それぞれの対象地域・時期における二次的環境の生成過程を的確に把握する必要があるが、本研究では主要古墳の周溝等に対する試掘調査を行い、花粉分析や火山灰分析を主体とする土壌分析を実施することを通じて、それぞれの地域と時期における景観の変容過程の解明を目指すこととした。なお上記の2地域を選択した理由は、「黄泉国」= 山中というような西日本一帯に広がる他界観を想定しえないためであり、いっぽう富士山や八ヶ岳のような火山を景観に有する地理的環境のもとでの他界観や方位観念の生成を考察したいとの意図が伴うことによる。

## 3. 研究の方法

本研究は、沖縄県域での考古学的実地調査および八重山地域に残された文献史料・伝承との比較点検作業によって、農耕集落における他界観や民俗方位の生成に関する「島嶼モデル」の完成を目指す。さらに後半には、奈良県域および神奈川県等の集落遺跡や古墳に対する考古学的調査と古環境復元を基礎に、「島嶼モデル」で抽出され

た諸項目と同等の情報を引き出す試みを実施し、それぞれの地域との比較点検を実施する。このような方法によってモデルの有効性を検証し3ヶ年度にわたって適用の可能性を模索することとした。

#### 4. 研究成果

##### 1) 平成24年度

本年度は沖縄県西表島網取遺跡の発掘調査を実施し、次の3つの課題に関する解明を図ることとした。

居住域における定住化の開始年代の絞り込み

碁盤目状集落区画の起点の解明

東側山麓に所在するとの伝承が残される「メブシ」の墓の確認と周辺地形測量・試掘調査の実施による正確な位置年代的問題・遺構としての性格の解明

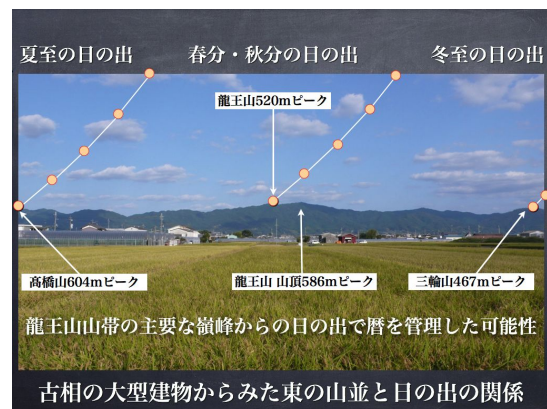
このうち については調査対象地の遺存状況が悪く、当該年度だけでは解明しえなかった。いっぽう については網取遺跡における他界観と方位観の生成過程を把握する上で特に重要な課題である。その理由は西縁の「ブシヌヤシキ」を男の象徴とし、東縁の「メブシ」の墓を女の象徴とする男女間の対峙関係としての空間認識が、民俗方位観念の中に埋め込まれた可能性を想起させるからである。現地調査の結果、「メブシの墓」の現況を確認し、測量調査を終えた。なお年代については出土遺物がなく確定できなかったものの、割り墓の構造は近世併行期にまでさかのぼらせることも可能であることを示した。

##### 2) 平成25年度

本年度は、勤務先から特別研究休暇を受けたことにより、奈良女子大学に半年間滞在する機会を得た。そのため奈良盆地に照準を定めて「島嶼部モデル」の普遍化が可能か否かを点検することとし、主要な遺跡や古墳と周辺景観の関係を追求することに

主眼を置いた。現地調査の結果、盆地中央に位置する唐古・鍵遺跡がその後の盆地全体の人為景観化に重要な役割りを演じた可能性が浮上することになった。

本遺跡から検出された大型建物から年間の日の出の位置を計測すると、冬至の日の出は三輪山山頂から、春分・秋分の日の出は龍王山 520m ピークから、夏至の日の出は高橋山山頂からであることを突き止めるに至ったからである(下図参照)。



年間の日の出は盆地の中央から見た龍王山山帯の範囲に限定され、主要な峰嶺は二支二分の日の出と対応するこの関係は、日の出の場所を基準に据えた暦とも関連するし、二支二分に対する由緒付けの構図でもあることを示している。さらに大和東南部古墳群は龍王山 520m ピークを背景の中心に据えたものであるし、三輪山は大神神社、高橋山は石上神宮と深く関連する。このことから、唐古・鍵遺跡で始まった太陽観測と暦と東の山並への由緒づけが、その後の奈良盆地におけるランドスケープデザインの中核であることが判明した。

さらに唐古・鍵遺跡出土の弥生時代中期に属する稲束を実地調査したところ、そこに稔った稲穂の分量は古代の1合に該当する可能性が高いことも判明し、稲束を貨幣とする歴史の起点や、稲の収穫を終えた冬季に開かれる大市の場合が本遺跡であった可能性も浮上することになった(次頁図参照)。すなわち「太陽信仰」の日本列島版ともい

うべき一連の人為景観化の実態をあぶり出すことになったといえる。



### 3) 平成 26 年度

本研究の後半の初年度となる平成 26 年度には、現地調査対象地を静岡県と神奈川県域に移し、弥生時代後期後半から古墳時代全般にかけての集落遺跡および墓域の動態を把握したうえで、「島嶼部モデル」で抽出された諸項目についての基礎データ整備を図った。

ここで重視したのは火山への由緒付けの構図である。初期前方後円（方）墳のなかには富士山にその軸線に向けるものが東海・関東には複数認められ、偶然の産物とはみなせないからである。墳丘築造企画の検討を含めた古墳と方位関係を分析した結果、東海から大廓型壺に稲穂を詰めて伊豆半島を越えて関東各地に市を開く営為が西暦 3 世紀には活発化したことと、各地の市の象徴として前方後円（方）墳は築かれるようになったのであろうとの大局的な理解に到達した。関東内陸部に築かれた前方後円（方）墳のなかに富士山を志向するものが含まれる事実は、本拠地における富士山信仰の拡散であると理解可能なことを示した（下図 3 点参照）。

さらに付带的に火山可視地帯の佐賀県吉野ヶ里遺跡の祭儀施設にみる雲仙に向けた直列配置を実施検証し、この直列配置は事実であることを確かめた。

以上の研究の結果、「島嶼部モデル」は水

稲農耕民に共通する宇宙観や他界観を復元する際の非常に有効な作業モデルであることが判明した。その際のキーワードは太陽の運行であったと理解される。いっぽう日本列島における特殊性は、火山への信仰が挿入されることであり、こちらは「島嶼部モデル」に火山可視地帯の派生型を加えることで説明が可能になる（上図参照）。本研究によって、このような図式をおおむね完成させることができたと考える。

### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 6 件)

1. 北條芳隆 2015「五塚原古墳と墳丘築造企画論の現在」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 102 集, pp. 107-127, 査読無
2. 北條芳隆 2014「稲束と水稻農耕民」『日本史の方法』11 号, pp. 5-28, 査読無
3. 北條芳隆 2014「纏向遺跡出土の巴形石製品に接して」『纏向学研究』第 2 号, 61-72, 査読無
4. 北條芳隆 2013「東の山と西の古墳」『考古学研究』第 59 巻 4 号, pp. 26-46, 査読有
5. 北條芳隆 2013「黄泉国と高天原の成立過程」『季刊考古学』第 122 号, pp. 57-61, 査読無
6. 北條芳隆 2013「高尾山古墳と墳丘築造企画論」『西相模考古』第 22 号, pp. 169-176, 査読無

〔学会発表〕(計 3 件)

1. 北條芳隆 2015「仏教伝来以前の他界観とランドスケープ」, 東北大学空間史学研究会 (2015 年 3 月 18 日), 宮城県・仙台市.
2. 北條芳隆 2015「関東地方への前方後円（方）墳の波及を考える-東松山市高坂 8 号墳を素材として-」『三角縁神獣鏡と 3～4 世紀の東松山』, 東松山市教育委員会 (2015 年 1 月 17 日), 埼玉県・東松山市.
3. 北條芳隆 2014「太陽信仰と大和」, 奈良女子大学公開講座 (2014 年 3 月 28 日), 奈良県・奈良市.

〔図書〕(計 1 件)

北條芳隆 他 2013『古墳時代の研究 4 (副葬品の型式と編年)』, 同成社, 260.

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：  
〔その他〕  
ホームページ等

## 6．研究組織

### (1)研究代表者

北條 芳隆 (HOJO YOSHITAKA)  
東海大学・文学部歴史学科・教授  
研究者番号：10243693

### (2)研究分担者

( )

### (3)連携研究者

( )

研究者番号：